



# 河盛好蔵 私の随想選

第七卷  
私の茶話

新潮社

Y Kawamori

河盛好蔵 私の随想選 第七巻

わたし  
わたくし  
私の茶話

一九九一年八月一日印刷  
一九九一年八月五日発行

著者 河盛好蔵

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

振替東京四一八〇八

電話 業務部〇三―三三六六―五一二  
編集部〇三―三三六六―五四二

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

価格は函に表示してあります。

ISBN4-10-645107-7 C0395

© Yoshizo Kawamori  
1991, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

第七卷\*私の茶話  
目次

## I エスプリとユーモア

|         |    |           |    |           |    |         |
|---------|----|-----------|----|-----------|----|---------|
| 日本訪問の心得 | 11 | 山県元帥とブドウ酒 | 13 | 選手と学生     | 15 | コニヤッ    |
| ク礼讃     | 16 | 新しい大臣たち   | 18 | 稽古事       | 20 | 自分だけの部屋 |
| をためるには  | 23 | 駅前旅館      | 25 | しゃべる外国語   | 27 | 勲章について  |
| 親馬鹿     | 31 | 本を買うこと    | 32 | 日本人のエネルギー | 34 | パリ祭     |
| 昼寝の季節   | 38 | シベリアの旅    | 40 | 外人教師      | 45 | 新聞小説論   |
| 性の魅力年齢  | 49 | 文学賞のこと    | 51 | 商売がたき     | 52 | 宝石について  |
| アルバイト   | 56 | 外国人の医者    | 58 | 三木武吉伝     | 60 | 苦節組     |
| 日の家族    | 64 | 他人の好意     | 66 | 番号のついた話   | 68 | 芸術家の良心  |
| イヌとサル   | 71 | 教師と夏休み    | 73 | 呼び水       | 75 | 政治家の逸話  |
| らずぐち    | 78 | 明治二十年代の日本 | 80 | 女と買物      | 82 | 笑いと国民性  |

## II ことば・ことば・ことば

|             |    |       |    |        |     |     |
|-------------|----|-------|----|--------|-----|-----|
| 誰でも最初は悪文だった | 89 | 言葉の遊び | 99 | 日本語の普及 | 103 | 翻訳に |
|-------------|----|-------|----|--------|-----|-----|

|           |     |           |     |       |     |       |     |    |
|-----------|-----|-----------|-----|-------|-----|-------|-----|----|
| ついて       | 106 | 日本文学の翻訳   | 109 | 献辞の話  | 113 | 俳句の輸出 | 121 | マド |
| モワゼル・シャルロ | 123 | 日本語に強くなる法 | 126 | 楽しみ辞典 | 129 | 語学    |     |    |
| 診療所       | 135 | フランス語の名人  | 139 |       |     |       |     |    |

### III よむ・かく

|            |     |           |     |         |     |        |
|------------|-----|-----------|-----|---------|-----|--------|
| 本とつき合う法    | 153 | 鷗外の『棕鳥通信』 | 177 | 荷風の手沢本  | 181 | 日記と    |
| 天候         | 182 | パリの書店     | 183 | ゴドフロワ辞典 | 185 | 読書の楽しみ |
| の本だな       | 189 | 私の本       | 191 | 私と辞書    | 192 | 本について  |
| 日本人としての栄養剤 | 198 | 文学者の日記の魅力 | 199 | 外国語五十年  | 201 |        |
|            |     |           |     |         |     | 書評屋    |
|            |     |           |     |         |     | 私      |

### IV こしかた

|        |     |       |     |          |     |       |     |   |
|--------|-----|-------|-----|----------|-----|-------|-----|---|
| 私の戦争協力 | 215 | 知らぬが仏 | 225 | 荻窪五十年    | 236 | 終戦前後  | 240 | 明 |
| 治と私    | 245 | 静かなる空 | 249 | フランス文学と私 | 258 | 阿佐ヶ谷会 | 261 |   |
| 卒業式    | 263 | 私と住まい | 264 | 幸せな病人    | 266 |       |     |   |

## V くらし

- 七色の敵 287 無口にも魅力 289 深情け 290 友人の細君を…… 292  
 目の悪い悩み 294 もうろく考 298 杖 301 法名について 304 煙草談  
 義 305 子供の国 307 筆不精 309 私とスポーツ 310 フランス人のケ  
 チ哲学 312 人生五十不愧無功 314

## VI 喫煙室

- ナポレオンの早飯 319 食卓での礼儀 322 美食文学詞華集 325 ワインと  
 文学 327 異国に病む 332 匂いと文明 335 口腹の文学 338 フォワ・  
 グラ 344 野鳥料理 347 ブドウ酒漫談 350 パリ祭の思い出 356 ボー  
 ドレール旅行 357 偉人ホテル 361 パリ百日 364 フランスの国鉄 367  
 仲秋名月 368 私の好きなレコード 369 古いプログラムから 377 ジョー  
 ジ六世のこと 381 松平信子 382 作家の寿命 394 露伴先生 395 ナル  
 ボンヌの蛙 397

|         |           |     |
|---------|-----------|-----|
| 後記      | 河盛好藏      | 402 |
| 初出・初収一覧 |           | 405 |
| ＊       |           |     |
|         | (編集) 島田昌治 |     |
| 年譜      |           | 409 |
| 著書目録    |           | 413 |



河盛好蔵 私の随想選

第七卷\*私の茶話



I

エスプリとユーモア



## 日本訪問の心得

『国際人の作法』という本がある。有名な「絵入世界案内叢書」の一冊で、アンドレ・モーロワ、ジュール・ロマン、ジャック・ド・ラクルテルというような国際的文学者が執筆している、便利で面白い本であるが、そのなかの日本の部を一寸紹介してみよう。つまり、日本へ旅行する人に、日本の作法を教えたもので、執筆者は、日本の女性で以前から女流文学者としてフランスで文名の高いキク・ヤマタ女史である。十五カ条にわたっているいろいろの注意が述べられているが、そのうち面白いものをあげてみると、

《もし諸君が冬にこの国を訪れるときは、羊毛のソックスを用意する必要がある。そして、お寺を訪問する場合には、更にもう一足補充しなければならぬ。でないと、足が冷えて折角の熱意も凍ってしまうだろうから》

《長居をしてはならない。とくに冬はそうである。でないと相手は火鉢を持ってこなければならなくなるから。いつまでも腰を落ちつけて相手を悩ましていると遠い台所で箒をさかさまにして立てられるだろう。これは不思議に諸君の帰りを急がせるということになっている》

《会話においては、そのために諸君のやってきた用事を決して単刀直入に切り出してはならない。まず天候の話から始めるがよい。個人的な話題も避けるべきだ》

《葬式の帰りには人を訪問してはならぬ。決して訪問してはならぬ。諸君はけがれているからである。したがってもし諸君が日本人の家に住んでいるときには、敷居をまたぐ前に、ひとつまみの塩を貰つて、象徴的にそれを身体にふりまかねばならぬ。それによつて諸君は不浄から清められるのである》

《たとえ諸君が、社交界の美しい夫人と同席しても、彼女たちにその美貌を賞める必要はない。彼女たちの夫に対してはなお更である。その方がつつしみ深いと思われるだろう》

《もし食事が芸者や、またはおめかしをした女中たちによつて興を添えられている場合には、彼女たちとふざける方がよい。でなければ、主人側は諸君を楽しませることができなかったのではないかと思うだろう。しかし、あまり色っぽくしてはいけない。こんどは主人に、諸君に女性を取り持たなければならぬと思わせることになるから。それは許されていることだが、しかし非常に高くつくことを覚悟せねばならない》

《諸君が悲しい、もしくは不快な事件を人に知らせる場合には、笑つてそれを言うことは許されるが、諸君の前で何か滑稽なことが起つても、無表情でいなければならぬ》

まずざつと右のような調子である。ここに書かれていることを金科玉条と心得て、日本を訪問する教養ある外国人のことを想像すると、なかなか愉快ではないか。しかし外国へ旅行する日本人もこれと似たようなことを先輩や経験者から教えられているのではないだろうか。

## 山県元帥とブドウ酒

大阪から旧友が上京してきたから久しぶりに同窓会をやるうではないかというので、三高時代のボン友が十人ばかり集まった。私たちは大正十二年の卒業であるから、そろそろ還暦に近くなっている。しかし皆元気で、青年のような気持でいるのは頼もしかった。

そのなかに、ある大会社の社長をしている男がいて、なかなかのブドウ酒通で、名酒シャトー・イケムを一ダースも秘蔵しているといつて私をうらやましがらせたが、「おれがブドウ酒にこり出したのは理由があるんだ」と言つて、次のような話をきかせてくれた。

この友人の父は毛利藩の家老であつたので、山県有朋元帥と親交があつた。山県元帥は大のブドウ酒好きで、中將の頃から、フランスに直接注文して樽でブドウ酒を取りよせ、晩酌には欠かしたことがなかった。第一次世界大戦のたけなわだつた頃、ある日、私の友人の父が元帥を小田原の古稀庵に訪ねると、元帥は、今日は実に感動した話があるという。それは、戦争のためしばらく音信が絶えていたフランスのブドウ酒の醸造元から手紙がきて、永らく手前の方の酒を愛用して頂いていたが、こんどの戦争で、諸事値上りになり、ブドウ酒の方もどうしても値段を上げなければならなくなつた。まことに心苦しいことではあるが、その代り、品質の方は絶対に落してないつもりである。どうだろう、今後も引続き御愛用願えるかどうか、お知らせ願いたいという文面なのである。

山県元帥は当時は日本で有数の人物の一人である。その名は海外にも広く知られている。しか

もその醸造元にとつては何十年にわたる顧客である。普通の店ならいくら値段が上がっても、どうせ金に不自由のない相手だと思ひ、そのまま酒を送りつづけて、そのあとから値上りの通知を出して代金を請求するであらう。それが、この店では永年のお得意であるだけに、値上げをするこゝとが心苦しく、さりとて事後承諾ではますます申しわけがないというので、鄭重な手紙で問い合わせてきたのであつた。

元帥は、「まことに見上げた商人である。日本の商人などには絶えて見られないことで、おれは全く感心した」と言つて、涙をぼろぼろこぼしていたという。私の友人、彼はその頃は陸軍幼年学校の生徒で、フランス語を習っていたが、父からその話をきいて、もともとフランスに好意をもっていただけに、非常に感心し、それからフランスのブドウ酒に興味をもち出したのだというのである。

私はこの話をきいて別の意味で大いに興味があつた。山県という人は剛腹をもつてきこえた人である。そのブドウ酒屋の手紙を見たときに、何をケチなことを聞いてきやがる、バカにするなと言つて腹を立てそうなものであるが、逆に、その細心な心づかいに感心したというのは、彼自身もまた非常に細心な人であつたからだと思われる。大胆にして細心というのはやっぱり英雄の特色であるらしい。